

教養教育グランドデザイン  
新たな知の創造  
高等教育における教養教育モデル  
文部科学省委託研究

概要

## 教養教育研究会報告書

はじめに	
望まれる教養教育 本研究会の目的	2
知のあり方(六つの知)	3
知の創造(新たな教養教育カリキュラム・モデルの骨子)	3
モデルの概要	3

## はじめに

教養教育研究会は、文部科学省よりの委託研究として、大学における新たな教養教育モデルの構築を目的に、2001年1月より調査・研究活動を開始した。研究会メンバーは慶應義塾大学を中心として北海道大学、東京大学、京都大学、国際基督教大学、武蔵工業大学、関西学院大学、国立民族学博物館、国際日本文化センター、慶應義塾高校の教員・研究者から構成された。本研究会は2002年3月の最終報告書・提言の提出を目指して、月一回合宿形式で行う全体会議を中心に、海外調査を含むさまざまな作業を行った。

この作業から生れたのが2002年3月にまとめられた報告書「教養教育グランドデザイン 新たな知の創造 高等教育における教養教育モデル」であった。本概要はこの報告書の理解を助けるために主だった内容を要約したものである。

## 望まれる教養教育 本研究会の目的

いつの時代にあっても大学は社会のリーダーを輩出すべき役割を担ってきた。本来リーダーを基盤において支えるものは、人類が築き上げてきたさまざまな知の体系に対する深い造詣であることは言うまでもない。だが、これを現実に適応するために、世界という座標軸における明確な自己位置の認識を持っていることもリーダーにとって不可欠の資質である。

大学における教養教育とは、そもそも学生にこのような基盤を与えることにほかならない。すなわち、古典から現代に至る知の有機的な連鎖を理解し、これを自らの経験と符合させ、自己内在化させることで確固たる世界観・価値観を確立することである。また、それを必要に応じて発展させる能力を養成することである。

とすれば、世界的な規模で社会が変動し、あらゆる領域において世界観・価値観の構造的変換が求められている現在、教養教育に対する大学の責任と役割はかつてないほどに大きなものとなっていると言えるだろう。今こそ大学には教育のあり方全体を抜本的に再検討し、有意・有効な新しい世界観・価値観を構築すること、そしてそれに基づいた新しい教育システムとプログラムを教育の現場において実践することが求められている。本研究会が目的としたのは、教養教育を軸としたそのための具体的かつ現実的なモデルを作成することであった。

報告書についてのお問合せは下記をお願いします。

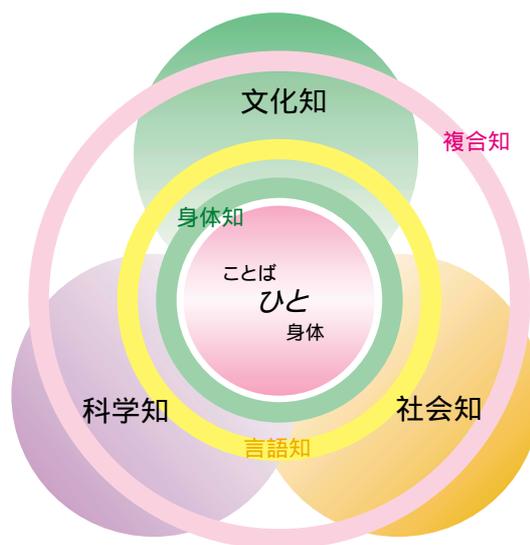
〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1  
慶應義塾大学 羽田功研究室

## 知のあり方(六つの知)

新たな教養教育モデルの構築を目指すために「知」の体系を次の六つに分類した。

図に示したように、ひとが何らかの知的活動を行う場合その基盤となるのはまず身体であり、その身体を土台として発話あるいは記述されることばである。この身体・ことばを中心とした「身体知」、「言語知」を用いながらひとはよりよい生き方を求めさまざまな知的活動を続けてきた。そして「文化知」、「社会知」、「科学知」という人類の叡智の集積といえる伝統的なディシプリン型の知の体系を築き上げてきた。さらに、今日の激動する社会における諸問題に対応するためには、これらの知の体系を活かしながらもそれを大胆に組みなおす「複合知」を新たに築き上げていくことも重要であろう。

本モデルでは、以上六つに分類した知を、総合的・相互関連的に学習することを大学における「教養教育」の具体的目的と位置づけた。



六つの知 「知」の小宇宙

## 知の創造(新たな教養教育カリキュラム・モデルの骨子)

1. 学士課程全体を教養教育の場として位置づける
  - 専門教育・一般教育という枠組みを根本から取り外し、学士教育全体を教養教育として位置づける。
2. 教育の質の徹底的な維持・管理
  - 学生と教師に適切なインセンティブを与え、互いに切磋琢磨するシステムを構築することにより、教育の質の維持・管理を大学全体の責任において確保する。
3. 教員同士がコラボレートすることによって広範囲に及ぶ多様な「知」の領域のつながりや統合を学生に伝える。
  - 教員自身が広大な知の体系における自らの専門分野の位置を確認し、知の連携と統合を念頭においた教育を行う。

## モデルの概要

### カリキュラムの特徴

**レベルおよびレベル・ポイント(LP)制** 従来の学年制・単位制に代る制度。授業はレベル1～4に区分され(言語・数学・情報・身体知科目を除く)、学生はレベル修了ごとにレベル・ポイントを取得する。卒業要件は、下記のグレード制科目・身体知科目のLPと合せて35LPとなる。

**複数専攻制** 知の体系の見取図を学ぶことを目的とするレベル1は全員必修の共通カリキュラ

ム。人類の知的資産の継承者としての最低限の基礎を与えるレベル2では異なる知の「系」から満遍なく履修する。レベル3では学生は二つ以上の分野を「専攻分野」として選び履修する。このうちレベル3で修了するものを「副専攻分野」、レベル4まで進んで卒業論文(制作)を提出するものを「主専攻分野」とする。

レベル1	フェイズ1(入学年次第1セメスター) スタディ・スキルズ、知の総合講座、ことばの総合講座 フェイズ2(入学年次第2セメスター)* スタディ・スキルズ、知の総合講座
レベル2	レベル2セミナー、レベル2科目、実習・実験等
レベル3	レベル3セミナー、レベル3科目、実習・実験等
レベル4	卒業論文・制作、レベル4関連科目、実習・実験等

\*第2セメスターにはレベル2科目の一部を開始してもよい。

レベルの構成

		LP合計	備考
モジュール制	レベル4(主専攻分野)	9	必要修得数1
	レベル3(副専攻分野)	6	必要修得数1
	レベル2	6~	必要修得数2~
	レベル1	5	
グレード制	言語	2~	言語は2言語
	数学	2~	
	情報	1~	
身体知		2~	
合計		35~	

卒業要件レベル・ポイント

**モジュール制科目** モジュールは、基本的にはある学問分野の一定のテーマに関する少人数セミナーを中心としてこれに関連する複数の科目群から構成される。

モジュール制科目は全員必修のレベル1を除き、レベル2では文化知・社会知・科学知・身体知の「系」、レベル3ではこれに複合知を加えた「専攻分野」ごとに設置される。したがって学生は従来のように相互に関連のない科目をただ数合せ的に履修することはできなくなる。

レベル4							
レベル3	専攻分野	専攻分野					
レベル2	系		系				
レベル1	-----						

モジュール制科目

	主専攻分野 レベル2～4 合計9LP	副専攻分野 レベル2～3 合計6LP		
レベル4	3LP			
レベル3	3LP	3LP		
レベル2	3LP	3LP	3LP	3LP
レベル1	5LP			

モジュール制科目のレベル・ポイント内訳

**グレード制科目** 言語・数学・情報についてはグレード制を導入し、能力別・目的別にグレードのクラスを設定することで、教員・学生双方のインセンティブを高める。(下図は、言語の例)

グレード	既習外国語(英語)	初習外国語	
12	リーディング、ライティング、ディスカッション、ディベート、プレゼンテーション、ネゴシエーション 目標値：TOEFL 620+	上級レベル (当該言語を使ってのアカデミックな活動。セミナー、論文作成、議論、プレゼンテーションなど)	外国語による専攻分野(主に英語)レベル8既習者対象  (外国語による授業)
11			
10			
9			
8	インプット アウトプット テーマ作文 目標値：TOEFL 550-580	中級レベル (日常生活に対応した言語能力の向上とアカデミックな活動の準備レベル)	初級外国語履修を前提とする専攻分野(主に英語以外)グレード4既習者対象 (地域文化論など外国語による授業を相当数取り入れる)
7			
6			
5			
4	高等学校まで履修  外国文化学習・ コンテンツ学習	初級レベル (基礎知識と日常生活に対応した言語能力)	
3			
2			
1			

新たな教養教育カリキュラム・モデルにおける外国語学習

**身体知科目** 実際の体験・経験を通じて獲得・確認することのできる知の領域を対象とする授業を設置する。身体・健康系(主にスポーツ、健康などの科目)、身体・表象系(音楽、演劇など芸術表現の科目)、フィールドワーク系(実習、実験、インターンシップ、野外学習、調査研究旅行等)に分かれ、それぞれ体験と理論の構成比によってカテゴリー化される。

カテゴリー1	(入門)	体験 8	: 理論 2	(実技中心科目)
カテゴリー2	(基礎)	体験 5	: 理論 5	(演習中心科目)
カテゴリー3	(応用)	体験 3	: 理論 7	(講義中心科目)
カテゴリー3	(応用)	体験 5	: 理論 5	(演習中心科目)
カテゴリー4		体験 2	: 理論 8	(卒業論文)
カテゴリー4		体験 8	: 理論 2	(卒業制作)

身体知科目のカテゴリー

□ 学制の問題 大学院・プロフェッショナル・スクールとの関係

教養教育と専門基礎教育を区別すべき分野、早期に専門基礎教育を開始すべき分野などについては、レベル2修了者を受け入れる専門コースを開設することができる。ただし、原則として専門コースは大学院との一貫コースとする。



大学院・プロフェッショナル・スクールとの接続(6・3・3・4制)

□ 課題と提言

モデル実現のための課題として、教養教育を支えるシステムとマネジメントの必要性(GPA制度の活用・学生および教員に対するサポート態勢の確立)、カリキュラム編成と教員組織の改編、入学試験制度の検討、初等教育と基礎学力の養成などが挙げられる(詳細は報告書を参照)。

□ 社会人教育

社会人に対して教養教育の機会を提供するための多角的な検討が必要とされる(詳細は報告書を参照)。

### モジュール制科目

	主専攻分野	副専攻分野
レベル4	卒業研究	
レベル3	経営	中国学
レベル2	経済・経営系	人類・歴史系 物理・化学系
レベル1	知の総合講座 ことばの総合講座 スタディ・スキルズ	

### グレート制科目

言語	数学	情報	
			グレート12
			グレート11
			グレート10
			グレート9
英語			グレート8
			グレート7
			グレート6
			グレート5
			グレート4
中国語	数学B3- 数学2	情報	グレート3
			グレート2
			グレート1

### 身体知科目

身体・健康系	身体・表象系	フィールドワーク系
太極拳C1	モダンダンスC1 合唱C1	研究旅行C3 ( )

地域・文化系、中国学専攻設置

### 新たな教養教育カリキュラム・モデルによる履修の一例

	%							
	<		Ⓔ	○	Ⓔ			E
	æ		U	°	U			
	O	°	"	°	"			
	N	°	l					
	O	x	x					
C								
{	æ	O	°	j	w	%	†	W
		°	j		m	<	{	°
w	æ				w	†	q	L
w					°	N	@	
°						Ⓔ		
@		]	]			Z	"	
		Ⓔ	Ⓔ		fl	O	§	
R		@	@		∅	æ		
@		a	'		°	B	¶	
w								

学生のクオリフィケーションを明示する卒業証書

教養教育研究会

文部科学省委託研究  
教養教育研究会報告書

**教養教育グランド・デザイン**  
**—新たな知の創造—**

高等教育における教養教育モデル

2002年3月31日発行

編集・発行 教養教育研究会  
〒223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1  
慶應義塾大学 羽田功研究室気付

制作 慶應義塾大学出版会株式会社  
〒108-8346 東京都港区三田 2-19-30

印刷 株式会社太平印刷社

©2002 Research Project on Liberal Arts Education in Japanese Universities  
著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。